

下増田上田中遺跡

一団体営土地改良総合整備事業（下増田百石地区）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

2012

群馬県安中市教育委員会

下増田上田中遺跡

— 団体営土地改良総合整備事業（下増田百石地区）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2012

群馬県安中市教育委員会



下増田上田中遺跡 1号墳全景（上が北東）



下増田上田中遺跡 1号墳全景（南東より）

口絵2



下増田上田中遺跡2号墳全景（上が北西）



下増田上田中遺跡2号墳全景（南より）

例 言

- 1 本書は旧松井田町（現安中市）が計画した団体営土地改良総合整備事業（下増田百石地区）に伴う下増田百石地区遺跡群のうち、下増田上田中遺跡に関する埋蔵文化財発掘調査報告書である。なお、本報告の内容は下増田上田中遺跡1号墳および2号墳を中心としている。
- 2 下増田上田中遺跡は安中市松井田町下増田字上田中地内に所在する。発掘調査および整理作業時において用いた遺跡の略称はSKである。
- 3 確認調査および発掘調査は旧松井田町教育委員会が主体となり直営で実施し、社会教育課田口修（当時）が担当した。資料整理は安中市教育委員会学習の森文化財係主事菅原龍彦、同主査（文化財保護主事）井上慎也、市行政事務嘱託壁 伸明が担当した。
- 4 確認調査は平成5年11月18日から12月27日、平成6年11月28日から12月27日、平成7年11月16日から12月7日、平成8年5月28日から6月21日の間、実施した。うち、本報告で扱う下増田上田中遺跡1・2号墳を含む下増田上田中遺跡のみ本調査を行った。調査期間は平成8年2月10日から3月1日（平成7年度）である。資料整理は調査終了後より平成24年2月まで断続的に実施し、報告書編集作成は合併後、平成23年度に行った。
- 5 本書の編集・執筆は菅原・壁が行った。遺構図およびデータ整理は菅原・井上・壁・中里徳子・鬼形敦子が行い、遺物整理は中里・鬼形が行った。
- 6 遺構写真の撮影は田口が行い、航空写真撮影は青高館に委託した。遺物写真の撮影は壁が行い、中里がこれを補佐した。
- 7 グリッド等の設置は上毛測量設計事務所に委託した。
- 8 発掘調査の記録・出土遺物は安中市教育委員会が保管している。
- 9 発掘調査および遺物整理の期間中、次の方々にご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します（敬称略・順不同）

神戸 聖語 右島 和夫 梅澤 重昭 井川 達雄 杉山 秀宏 田口 一郎
若狭 徹 加部 二生 坂本 和俊 志村 哲 長井 正欣 横澤 真一
坂口 一 藤野 一之

凡 例

- 1 遺構実測図は1/80を基本としている。これ以外については図中に縮尺を記した。
- 2 遺物実測図は1/6を基本としている。これ以外については図中に縮尺を記した。
- 3 本文および土層説明等で示す記号および火山灰の略称は次のとおりである。
S：石 As-A：浅間A軽石 As-B：浅間B軽石 As-C：浅間C軽石
- 4 土層断面図中のトーンをかけた層は、As-B一次堆積層である。
- 5 遺物の観察については観察表で記した。なお、観察表中の（）内は推定値を示す。
- 6 埴輪の観察表中、「法量」の項目で（口・底・高）とあるのは、それぞれ口径・底径・器高を示す。
- 7 埴輪の観察表中、「底面」の項目で「右」とあるのは、埴輪を逆さまにして底面に上に見たとき、基底部の粘土板の重なりが右側が上になっていることを示す。

目 次

例言	
凡例	
I 調査の経緯	1
1 調査に至る経過	
2 調査の経過	
(1) 発掘調査の経過	
(2) 資料整理の経過	
II 調査の方法	3
III 遺跡の地理的・歴史的環境	3
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
3 層序	
IV 遺跡群の概要	7
V 検出された遺構と遺物	7
1 遺跡の概要	
2 遺構・遺物の概要	
VI 成果とまとめ	30
写真図版	
抄録	

挿 図 目 次

第1図	年度別開発区域図	2
第2図	周辺の遺跡位置図	5
第3図	下増田上田中遺跡基本層序	6
第4図	試掘トレンチ位置と検出された遺構	8
第5図	下増田上田中遺跡1号墳・2号墳位置図	9
第6図	下増田上田中遺跡1号墳平面図・エレベーション図	10
第7図	下増田上田中遺跡1号墳全体図・セクション図	11
第8図	下増田上田中遺跡1号墳石室微細図・遺物出土位置図	13
第9図	下増田上田中遺跡1号墳石室展開図	14
第10図	下増田上田中遺跡1号墳壇輪出土位置図・等高線図	15
第11図	下増田上田中遺跡1号墳出土遺物実測図(1)	16
第12図	下増田上田中遺跡1号墳出土遺物実測図(2)	17
第13図	下増田上田中遺跡1号墳出土遺物実測図(3)	18
第14図	下増田上田中遺跡1号墳出土遺物実測図(4)	19
第15図	下増田上田中遺跡2号墳全体図・セクション図	23
第16図	下増田上田中遺跡2号墳等高線図	25
第17図	下増田上田中遺跡2号墳石室平面図・エレベーション図	26
第18図	下増田上田中遺跡2号墳石室微細図・エレベーション図	27
第19図	下増田上田中遺跡2号墳石室展開図	28
第20図	下増田上田中遺跡2号墳出土遺物実測図	29
第21図	裏込めおさえ石の推定ライン	31

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	4
第2表	下増田上田中遺跡1号墳出土遺物観察表	20
第3表	下増田上田中遺跡2号墳出土遺物観察表	29

写真図版目次

図版1	下増田上田中遺跡全景（上が北） 1号墳石室全景（北より）
図版2	1号墳石室・円筒埴輪列検出状況（南より） 1号墳墓石検出状況（西より） 1号墳表道検出状況 1号墳調査区西壁土層堆積状況（第7図A～A'） 1号墳調査風景（西より）
図版3	1号墳玄室遺物出土状況1 1号墳玄室遺物出土状況2 1号墳表道遺物出土状況1 1号墳円筒埴輪出土状況 1号墳表道遺物出土状況2（南東より）
図版4	2号墳全景（南西より） 2号墳墓石検出状況1 2号墳墓石検出状況2 2号墳全景（南東より） 2号墳石室調査風景（南より）
図版5	2号墳石室検出状況（南より） 2号墳遺物出土状況1 2号墳遺物出土状況2 2号墳墳丘断ち割り状況1 2号墳墳丘断ち割り状況2
図版6	1号墳出土遺物（NO 1～6）
図版7	1号墳出土遺物（NO 7～12）
図版8	1号墳出土遺物（NO13～22）
図版9	1号墳出土遺物（NO23～46）
図版10	1号墳出土遺物（NO47～73） 2号墳出土遺物（NO 1～6）

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

安中市松井田町下増田地区は、九十九川の支流である増田川の下流域に位置している。増田川は九十九川最大の支流であり、流域面積では本流の九十九川を上回る。本河川は下増田地区の南東において九十九川に合流している。増田川の北には長者久保・上野丘陵が、南には細野丘陵が並走する。下増田地区は両丘陵の末端部付近に位置するため、丘陵上においても全体的には緩やかな地形が展開している。増田川両岸にも比較的広い低地が広がっており、主に水田として利用されてきた。しかし、緩やかに蛇行する増田川両岸の水田は、地形の制約を受け不整形で狭小なものが多く、近年の機械化農業に適さない点があった。大型機械にも対応できる、効率的農作業を目指した土地改良事業の実施は、当然の時代の流れと言えよう。こうした地元の要望を受け、平成5～8年度の4年計画で、下増田地区の土地改良事業を実施することとなった。なお、確認調査は工事年度の作物収穫作業終了後に行い、本調査が必要な場合は引き続いて実施することとした。

平成5年11月12日、平成5年度工事区域における確認調査依頼が、松井田町長（当時は碓氷郡松井田町）より松井田町教育委員会に提出された。これを受け11月18日より確認調査を実施した。以下、平成8年度まで下表のような日程で調査を実施した。なお、本調査を実施したのは平成7年度のみであり、他の年度は確認調査だけで終了している。

年 度	開発面積	確認調査	本調査	備 考
5年度	3.4㍓	5年11月18日～12月27日		本調査なし
6年度	8.6㍓	6年11月28日～12月27日		本調査なし
7年度	10.5㍓	7年11月16日～12月7日	8年2月10日～3月1日	2月25日現地説明会開催
8年度	3.0㍓	8年5月28日～6月21日		本調査なし

2 調査の経過

(1) 発掘調査の経過

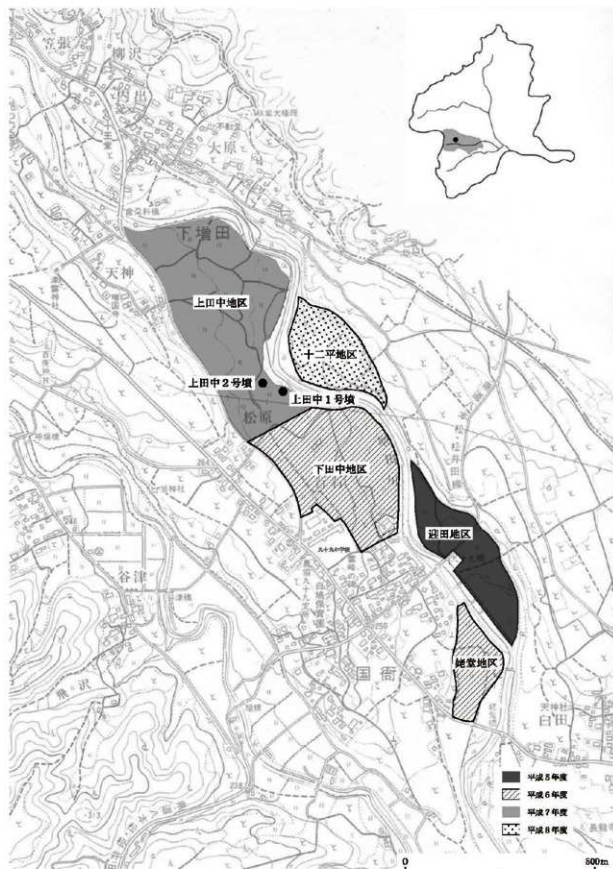
今回の調査は平成5～8年度の4年間にわたり実施された。平成5年度開発区域における新設道路の方向を基準に、一辺50mの大グリッドを設定した。5年度開発区域の東南端部付近をA-0グリッドとし、西へはアルファベットでB・C・D・・・、北へは1・2・3・・・、南へは-1・-2・-3・・・とし、アルファベットと数字を組み合わせ、北東隅を代表させグリッドを表記した。新設道路の方向を基準としたグリッド設定のため、座標軸とグリッド軸は一致しておらず、国家座標にも取り付けていない任意のグリッドである。

確認調査は、バックホーにより道水路部分を中心にトレンチを掘削した。トレンチ内に遺構が確認された場合、拡張し遺構の全体像の把握に努めた。なお、確認調査により検出された住居址・土坑等が、さほど広範囲には展開しないと判断した場合、調査期間の制約等もあるため、そのまま試掘調査の範囲内での記録保存とした。先述のように、平成7年度以外は確認調査のみで終了している。

(2) 資料整理の経過

資料整理は、調査終了後から平成23年度にかけて断続的に実施した。出土した遺物は、洗浄・注記を順次行い、可能な限り接合・復元を試みた。復元した遺物の中で、資料的価値の高い個体について実測・トレースを行った。また、出土した鉄器の一部については、保存処理を施した。

遺物整理作業と並行して、遺構図面の整理・修正、図版作成等も実施した。また、現場で撮影した遺構写真についても整理を行った。



第1図 年度別開発区域図

II 調査の方法

平成7年度に実施した本調査では、遺構確認面（5層上面付近、第3図参照）までバックホーにより掘削し、その後人力でジョレンを用いての遺構確認を行った。

検出された遺構については、遺構番号を付し、内容に応じた精査を行った。土層断面は、土層観察ベルトを遺存状況が良好な部分に適宜設定し、記録した。遺構測量は平板測量を基本とし、出土した遺物については可能な限り位置と高さを記録した。各遺構の土層断面状況・遺物出土状況・完掘状況等は、カラーリバーサル及びモノクロフィルム（35mm）で写真撮影を行った。作業風景等も適宜撮影した。遺構の航空写真撮影は、青高館に委託しバルーンを用い撮影した。

III 遺跡の地理的・歴史的環境

1 地理的環境

安中市は関東平野の周辺部である群馬県の南西部に位置し、西は碓氷峠を挟んで長野県北佐久郡軽井沢町と接している。長野県との県境には、留夫山・一ノ字山・矢ヶ崎山等の標高1000mを超える山々が連なっている。これらの山の付近からは数多くの小河川が流出している。それらの小河川は合流を重ねつつ市東部の平野へと至り、やがては碓氷川となり高崎市で烏川に合流する。これらの河川の中で比較的大規模なものが碓氷川と、その支流である九十九川、さらに九十九川の支流である増田川である。この3本の河川は、並行するように北西より南東方向へ流下している。それぞれの河川の間には河岸段丘が発達し、分水嶺となる丘陵が河川に並走するように延びている。すなわち、北から増田川左岸の長者久保・上野丘陵、増田川と九十九川の間位置する細野原丘陵、九十九川右岸の松井田丘陵である。

本遺跡が位置するのは、細野原丘陵の末端付近であり、増田川を眼下に望む段丘上である。遺跡地下流（南東方向）において、増田川は九十九川に合流している。遺跡地の標高は240～250m程である。

2 歴史的環境

本遺跡の周辺では、縄文時代～奈良・平安時代を中心に多くの遺跡が確認されている。それらについて概観する（括弧内数字は第2図及び第1表に対応する）。

縄文時代では、本遺跡の南に位置する下増田松原遺跡（3）において前期諸磯式期の住居址が確認されている。また、遺構は確認されていないが、国衙森浦遺跡（5）・国衙朝日遺跡（6）においては、前期から後期の遺物が一定量出土している。長者久保・上野丘陵上に位置する下増田下原遺跡（2）では中期加曾利E式期の住居址が、小日向田中西遺跡（14）では後期堀之内式期～加曾利B式期の敷石住居址がそれぞれ検出されている。九十九川上流に位置する高梨子三次郎遺跡（10）・高梨子森下遺跡（8）では、遺構は検出されていないが晩期の土器が出土している。さらに、特殊な遺構・遺物としては、小日向老丁田II遺跡（16）において中期加曾利E式期の列石が確認されている。また、下増田天神原遺跡（4）からは、表面採集ではあるが三角錐形土製品が出土している。

弥生時代中期後半栗林式期以降、九十九川流域には次第に集落が形成され始め、後期樽式期にそのピークを迎える。栗林式期の住居址は国衙朝日遺跡・国衙下辻遺跡（7）・小日向遠地谷戸遺跡（19）等において検出されている。後期樽式期の住居址は国衙朝日遺跡・小日向田中遺跡（15）・小日向老丁田II遺跡・小日向老丁田遺跡（17）・小日向瀧遺跡（18）・小日向遠地谷戸遺跡・杉名薬師遺跡（25）・高橋遺跡（26）等で多数検出されており、九十九川流域には大集落が営まれていたと考えられる。また、九十九川流域における当該期の墓制については、検出例が少なく不明な点が多いが、小日向田中西遺跡においては、禊床墓が1基検出されている。さらに、国衙下辻遺跡の栗林式期住居址からは独鈷石化石

	遺跡名	縄文					弥生		古墳			奈良	平安	中世	近世	備考	
		旧	草	早	前	中	後	晩	中	後	前						中
1	下増田上田中				○							◎		○		本書報告遺跡	
2	下増田下原				○								○◎				
3	下増田松原			○							※		※				
4	下増田天神原			△									○				
5	国衙森浦			※	※	※							○				
6	国衙朝日			※	※	※		○					○				
7	国衙下辻				※		○	※		○	○			△			
8	高梨子森下			※	※	※	※		○	○	◎		◎		Aa-B下水田		
9	高梨子柳下												○				
10	高梨子三次郎			※	○	※	※	※				◎	◎				
11	愛宕山			※	※	※						○	◎				
12	小日向上新浜									◎							
13	小日向白山							※			◎		○				
14	小日向田中西				○	◎				○	◎		○◎	△	弥生後期礎床基検出		
15	小日向田中							◎	◎	◎	◎		△				
16	小日向老丁田Ⅱ				○			◎	◎	◎	◎		※	※			
17	小日向老丁田							◎	◎	◎	◎						
18	小日向瀬							◎	◎	◎	◎						
19	小日向遠地谷戸				※	※		○	◎	◎	◎			△			
20	小日向遠丸							※			◎				古代大型掘立柱建物群		
21	鍛冶ヶ嶺			○								◎	◎				
22	榎木畑			◎	◎							◎	◎				
23	嶺・下原										◎	◎	◎				
24	清水			◎	○						◎	◎		○			
25	杉名薬師		※	※	※	※		△	◎	◎	◎						
26	高橋							◎		◎	◎		○				
27	道路状遺構?													○	中世以降の所産? 前方後円墳、初期横穴石室 円墳、初期横穴石室(T字形) 円墳 前方後円墳、初期横穴石室? 円墳		
28	築瀬二子塚										◎						
29	後関3号墳										◎						
30	瀬1号墳										◎						
31	翠平山古墳										◎						
32	国衙下辻1号墳										◎						

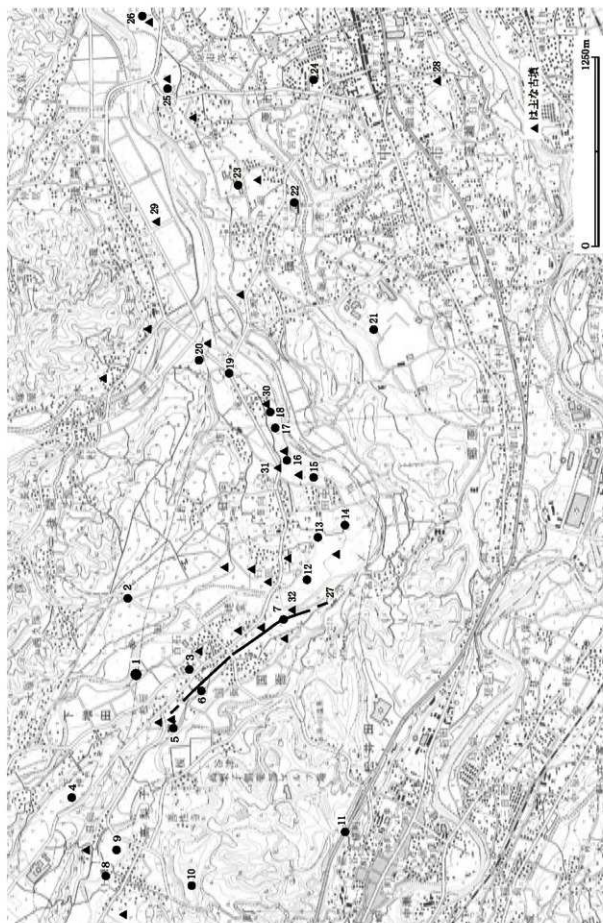
◎:大規模な遺跡(集落跡・古墳等)

○:中規模な遺跡(住居址・土坑等)

△:小規模な遺跡(土坑・溝等)

※:遺物が出土した遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧



第2図 周辺の遺跡位置図

器（両頭石斧）が出土している。この独鈷石状石器は、長野県善光寺平周辺地域の遺跡（長野市松原遺跡）出土のものと酷似しており、当該期における両地域の交流を示唆するものである。

弥生時代後期の大集落は、古墳時代になるとともに姿を消す。古墳時代前期の集落は、高梨子森下遺跡・小日向上新浜遺跡(12)・小日向田中遺跡等において、小規模なものが確認されているだけである。5世紀後半頃より、九十九川流域には再び大規模な集落が営まれ始める。高橋遺跡・小日向遠丸遺跡(20)・小日向遠地谷戸遺跡・小日向田中西遺跡・小日向白山遺跡(13)等において6世紀から7世紀を中心とする、比較的大規模な集落が確認されている。

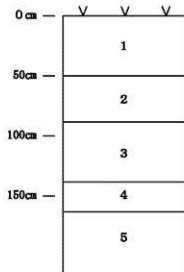
また、これらの集落の成立に伴い、九十九川流域には多数の古墳が築造される。現在確認されている古墳の中で最古のものは、小日向瀬遺跡1号墳(30)と国衙下辻遺跡1号墳(32)であり、ともに5世紀末～6世紀初頭の築造と推定される。本遺跡1号墳と同じくT字形石室を有する後閑3号墳(29)は、6世紀前半の築造と考えられる。本市最大であり、初期横穴式石室を有する築瀬二子塚(28)と、後閑3号墳・本遺跡1号墳は、以前より石室構造等の類似性が指摘されている。琴平山古墳(31)は、全長約50mの前方後円墳であり、6世紀前半の築造と考えられる。昭和初期の道路工事により主体部は破壊され、石室構造等の詳細については不明であるが、初期横穴式石室の可能性が高い。同古墳からは石見型埴輪が出土している。

古代の遺構も、比較的多く確認されている。ただし、奈良時代の集落等の遺構は九十九川右岸に集中する傾向が顕著であり、当該期集落は鍛冶ヶ嶺遺跡(21)・榎木畑遺跡(22)・嶺・下原遺跡(23)で確認されている。九十九川右岸の小日向地区・国衙地区・下増田地区等においては、奈良時代の遺構は比較的少なく、9世紀以降の集落は、小日向田中西遺跡・小日向白山遺跡・国衙朝日遺跡・高梨子森下遺跡等で確認されている。また、古代律令体制期の官道である東山道は、九十九川沿いに築かれ、本遺跡地の南側を通過していたとする考えもあるが、現時点までの周辺地域の発掘調査においては、東山道と考えられる道路址は確認されていない。ただし、国衙下辻遺跡の調査において、顕著な硬化石面を有するAs-B混土層が現農道下において数百mにわたり確認されている(27)。現存する地割りを併せて考えても、この部分に中世以降の道路が存在した可能性は高い。

3 層序

本遺跡地周辺地域では、比較的厚く黒色土の堆積が認められ、堅穴住居址等の遺構の遺存状況は良好である。ただし、本書において報告する2基の古墳については、後世の耕作により、墳丘上部が削平されていた。本遺跡地の基本層序は次のとおりである。

1層	褐灰色土層	現在の水田耕作土
2層	暗褐色土層	As-Aを含む 安中市基本土層Ⅰa層
3層	黒色土層	As-Bを含む 安中市基本土層Ⅱa層
4層	灰褐色軽石層	As-B一次堆積層 安中市基本土層Ⅱb層
5層	黒褐色土層	As-B下位の黒色土 安中市基本土層Ⅲ層



第3図 下増田上田中遺跡 基本層序

IV 遺跡群の概要

本土地改良事業は、平成5年度から8年度の4年間に、4工区に分けて実施された。確認調査及び本調査において、縄文時代～平安時代の遺構・遺物が確認された。以下、年度別に検出された遺構の概略を述べる（第1図及び第4図参照）。

（平成5年度）

増田川左岸の迎田地区において確認調査を実施した。16本の試掘トレンチを掘削し、古墳時代の所産と推定される住居址1棟、As-B軽石に被覆された畝址等が確認された。

（平成6年度）

平成6年度の確認調査は、増田川右岸下流の姥堂地区と、上流の下田中地区において実施された。姥堂地区では6本の試掘トレンチを掘削したが、遺構は確認されなかった。遺物も平安時代土師器片が1点出土したのみである。下田中地区では14本の試掘トレンチを掘削し、古墳時代住居址1棟・土坑2基、時期不明溝1条・土坑8基等が検出された。遺物は縄文時代～平安時代までの土器が出土した。

（平成7年度）

増田川右岸の上田中地区において確認調査を実施した。34本の試掘トレンチを掘削し、縄文時代中期住居址1棟、6世紀代の古墳2基、平安時代住居址1棟等が検出された。本年度のみ、確認調査に引き続いて本調査を実施した。詳細は次章に記す。

（平成8年度）

増田川左岸の十二平地区において確認調査を実施した。12本の試掘トレンチを掘削し、平安時代住居址2棟・土坑1基、時期不明土坑3基等が検出された。遺物は平安時代土師器・須恵器・鉄器の他、炭化種子が出土した。

V 検出された遺構と遺物

1 遺跡の概要

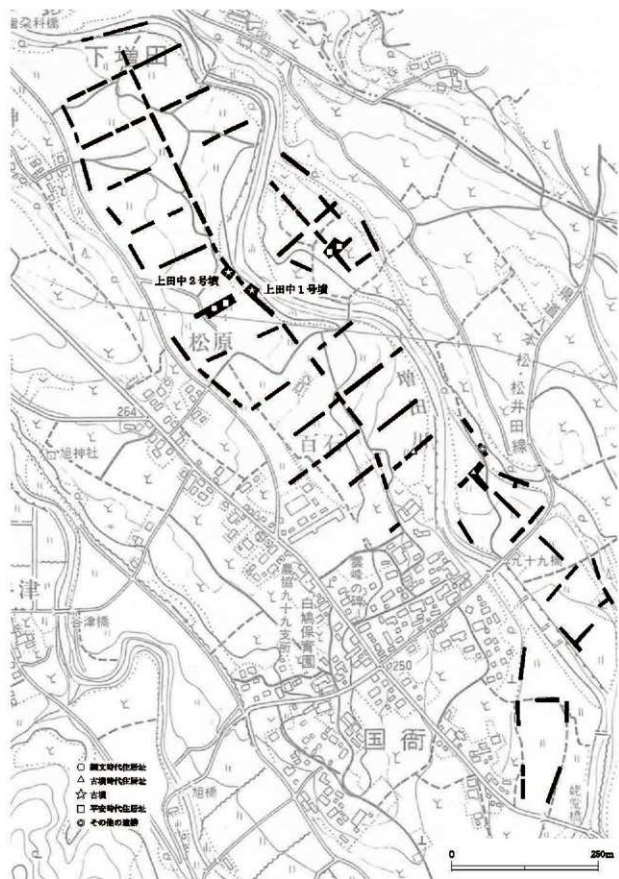
下増田上田中遺跡は、蛇行する増田川を眼下に望む右岸段丘上に位置している。遺跡地の標高は約250mであり、増田川との比高差は約10mを測る。先述のように、確認調査によって縄文時代～平安時代までの遺構・遺物が確認された。縄文時代では、中期末葉加曾利E式期の住居址が1棟検出された。この住居址は、南東方向に張り出し部を有する柄籠形敷石住居址である。住居中央付近には、ほぼ正方形を呈する石囲炉を有する。また、張り出し部端部付近からは、正位の埋設土器が出土している。古墳時代では古墳が2基確認された。いずれも円墳であり、下増田上田中遺跡1号墳と、同2号墳と呼称している。ともに6世紀前半の所産と推定される。その他にも、平安時代住居址1棟、時期不明溝5条・土坑6基・集石遺構1基等が確認されている。

2 遺構・遺物の概要

ここでは、本書において報告する1号墳と2号墳について、その概要を述べる。

（下増田上田中遺跡1号墳）

1号墳は平成7年度開発区域の南東端付近に所在する。本古墳は増田川右岸段丘の縁に築造されたため、蛇行する増田川の浸食作用を受け続けたと考えられる。この結果、調査時には北東部の墳丘の一部が、浸食に起因する崩落により失われていた。また、1号墳・2号墳ともに、後世の耕作等により墳丘は削平されており、調査前は水田として利用されていた土地において検出された。つまり、周知の古墳として認識されていなかった。このため、両古墳とも天井石及び石室上半の部分は破壊されており、石



第4図 試験トレンチ位置と検出された遺構

室基部のみ遺存していた。

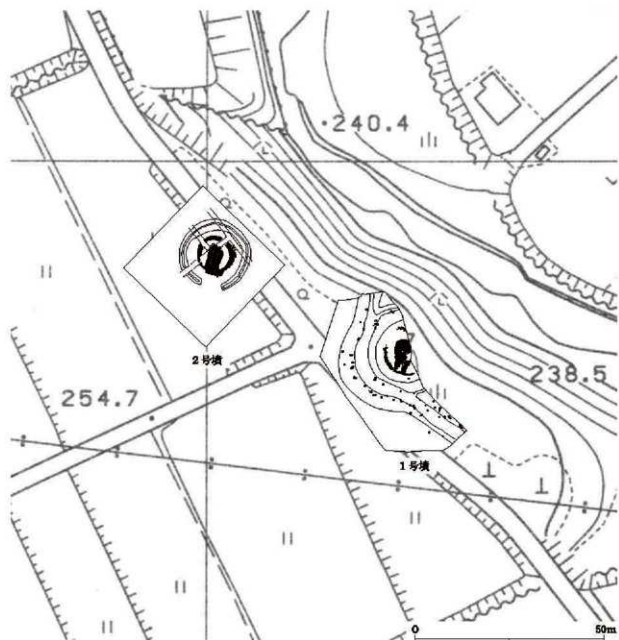
1号墳の一番の特徴は「T字形石室」を有する点にある。T字形石室とは、羨道に対して玄室が横長の方向に築かれている石室であり、平面形態は文字通りT字形を呈する。本市にはT字形石室を有する古墳がもう1基存在する。本古墳の東方約3kmに所在する後園3号墳である(第2図NO29)。築造時期は、ともに6世紀前半と推定される。

遺物は比較的多く出土している。ほぼ原位置を保つと推定される円筒埴輪が15点(うち2点は朝顔形)、石室内からは鉄鏃・刀子等の鉄製品、管玉・切子玉・ガラス小玉等が出土している。

(下増田上田中遺跡2号墳)

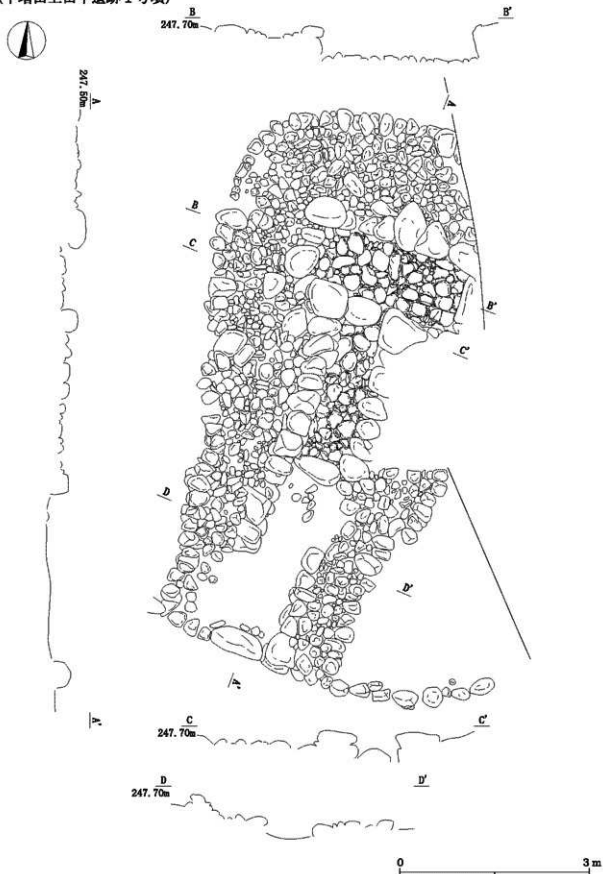
2号墳は1号墳の北西約30mに所在する。直径約19mの円墳であり、石室は羨道と玄室の幅が変わらない「無袖型石室」である。築造時期は6世紀前半頃と推定される。

遺物は、埴丘・周瀬から土師器小形壺・坏が、石室内から刀子・鉄鏃等が出土している。埴輪は確認されていない。

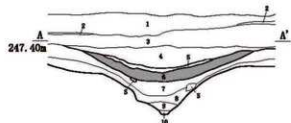


第5図 下増田上田中遺跡1号墳・2号墳位置図

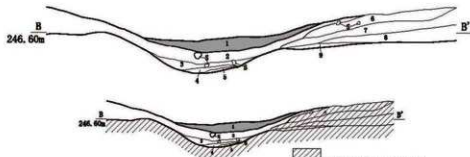
(下増田上田中遺跡1号墳)



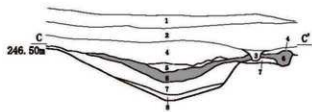
第6図 下増田上田中遺跡1号墳平面図・エレベーション図



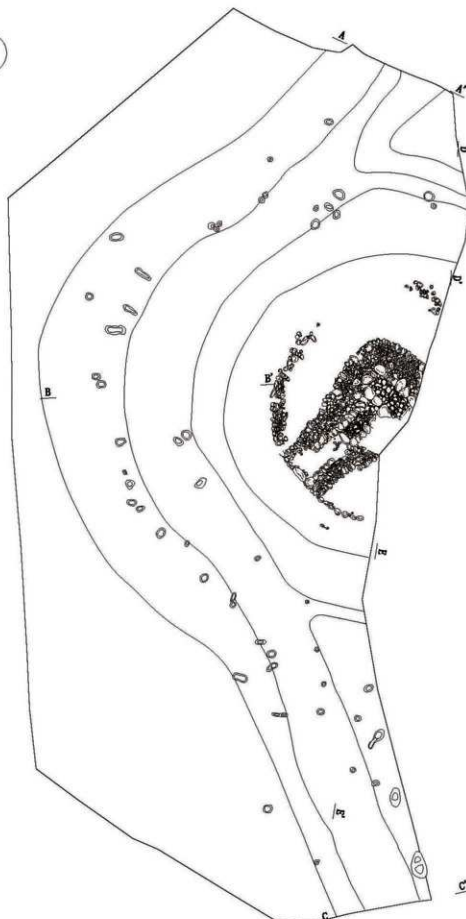
- 第1層 表土。一定範囲で埋した土。
 - 第2層 暗褐色土。腐葉土状、乾くとブロッコ状に崩れる。内側の表層が厚く、
 - 第3層 暗褐色砂質土。白色腐葉土・白色腐葉土 (a+b) を含み込む。しまっている。
 - 第4層 暗褐色腐葉土。白色腐葉土 (a+b) を少量含む。砂粒も含まれる。
 - 第5層 暗褐色土。灰白色腐葉。
 - 第6層 暗褐色土。a+b-砂質。
 - 第7層 暗褐色土。腐葉を少量含む。おぼろげに埋りかかっている。
 - 第8層 暗褐色土。暗褐色を少量含む。7層より厚みがある。
 - 第9層 暗褐色土。10~20cm程度の厚さがある。
- 記号 〓—A-A'—暗褐色土・腐葉土



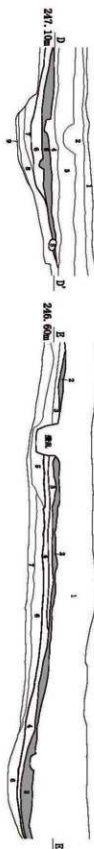
- 第1層 暗褐色土。a+b-砂質。
- 第2層 暗褐色土。しまりなし。
- 第3層 暗褐色土。白色腐葉を少量含む。
- 第4層 暗褐色腐葉土を少量含む。4層より色調が濃い。
- 第5層 暗褐色土。a+b-10cm程度の厚さを含む。
- 第6層 暗褐色土。2層に近似的。2層より色調が濃い。
- 第7層 暗褐色土。白色腐葉を少量含む。
- 第8層 暗褐色土。白色腐葉を少量含む。
- 第9層 暗褐色土。白色腐葉を少量含む。



- 第1層 表土。腐葉土状、乾くとブロッコ状に崩れる。内側の表層が厚く、
- 第2層 暗褐色腐葉土。白色腐葉土・白色腐葉土 (a+b) を含み込む。しまっている。
- 第3層 暗褐色腐葉土。白色腐葉土 (a+b) を埋している。埋りかかると、中央部が削れている。
- 第4層 暗褐色腐葉土。白色腐葉土 (a+b) を少量含む。砂粒も含まれる。
- 第5層 暗褐色土。灰白色腐葉。
- 第6層 暗褐色土。a+b-砂質。
- 第7層 暗褐色土。腐葉を少量含む。おぼろげに埋りかかっている。
- 第8層 暗褐色土。暗褐色を少量含む。7層より厚みがある。



第7図 下増田上田中遺跡第1号墳全体図・セクション図

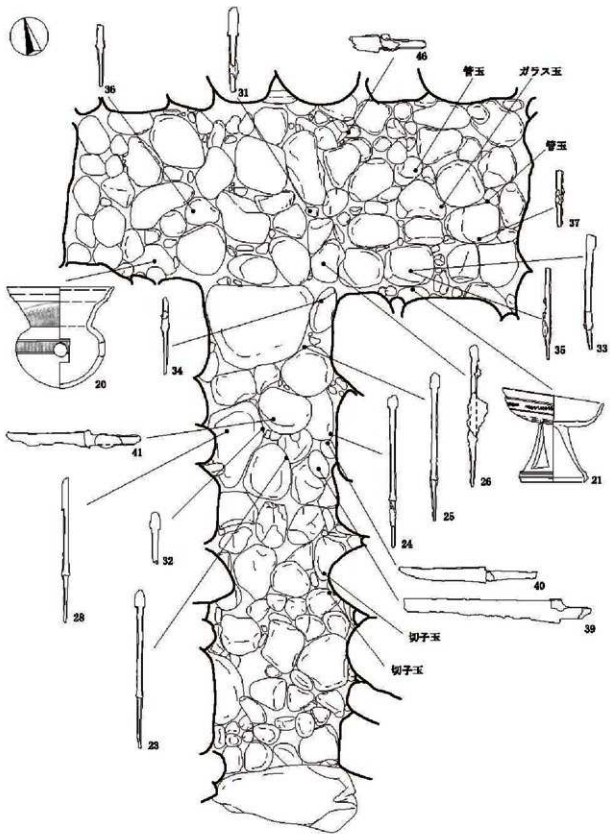


- 第1層 表土。腐葉土状、乾くとブロッコ状に崩れる。内側の表層が厚く、
 - 第2層 暗褐色腐葉土。白色腐葉土・白色腐葉土 (a+b) を含み込む。しまっている。
 - 第3層 暗褐色腐葉土。白色腐葉土 (a+b) を少量含む。砂粒も含まれる。
 - 第4層 暗褐色腐葉土。白色腐葉土 (a+b) を少量含む。砂粒も含まれる。
 - 第5層 暗褐色土。灰白色腐葉。
 - 第6層 暗褐色土。a+b-砂質。
 - 第7層 暗褐色土。腐葉を少量含む。おぼろげに埋りかかっている。
 - 第8層 暗褐色土。暗褐色を少量含む。7層より厚みがある。
 - 第9層 暗褐色土。10~20cm程度の厚さがある。
- 記号 〓—D-D'—暗褐色土・腐葉土

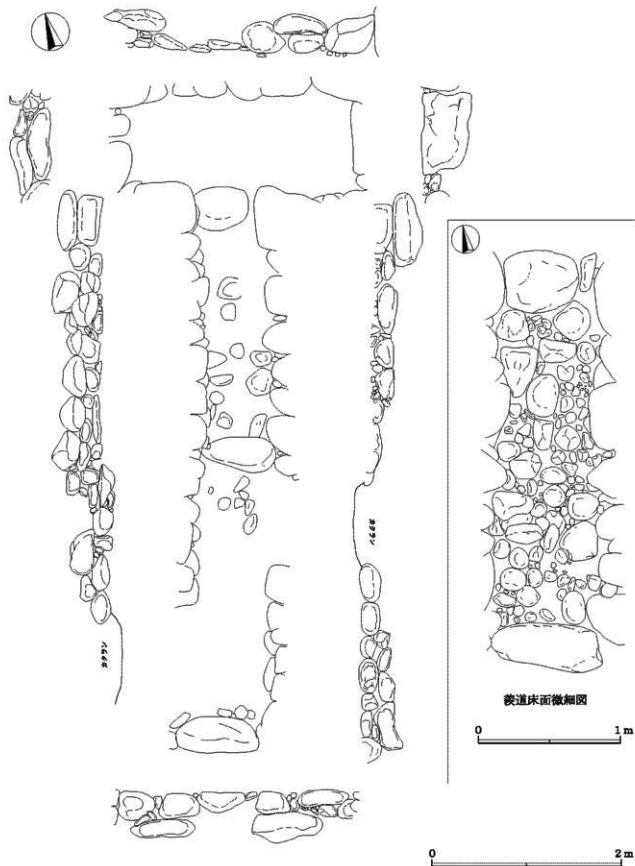
- 第1層 表土。腐葉土状、乾くとブロッコ状に崩れる。内側の表層が厚く、
 - 第2層 暗褐色腐葉土。白色腐葉土・白色腐葉土 (a+b) を含み込む。しまっている。
 - 第3層 暗褐色腐葉土。白色腐葉土 (a+b) を少量含む。砂粒も含まれる。
 - 第4層 暗褐色腐葉土。白色腐葉土 (a+b) を少量含む。砂粒も含まれる。
 - 第5層 暗褐色土。灰白色腐葉。
 - 第6層 暗褐色土。a+b-砂質。
 - 第7層 暗褐色土。腐葉を少量含む。おぼろげに埋りかかっている。
 - 第8層 暗褐色土。暗褐色を少量含む。7層より厚みがある。
 - 第9層 暗褐色土。10~20cm程度の厚さがある。
- 記号 〓—E-E'—暗褐色土・腐葉土

は墳丘構築土または地山

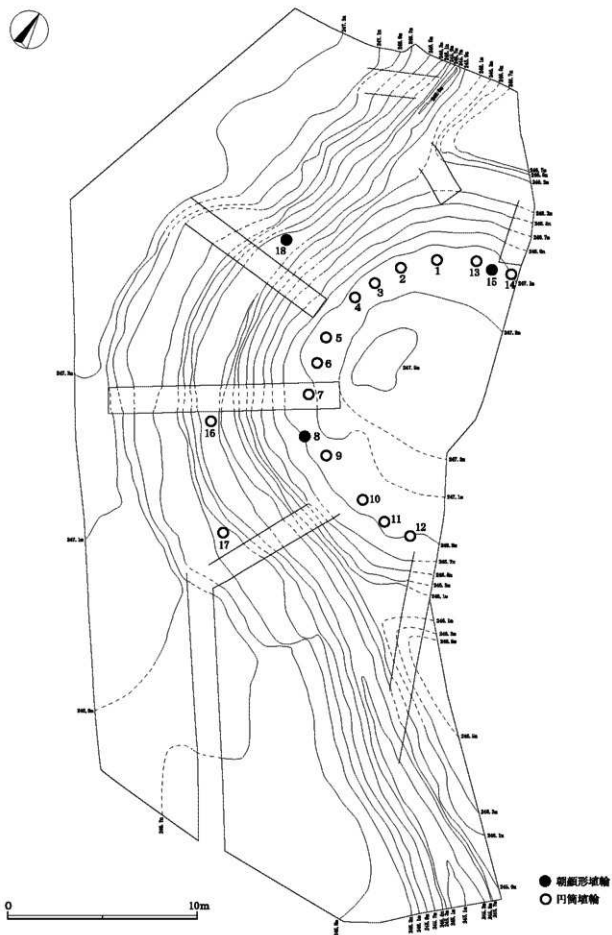




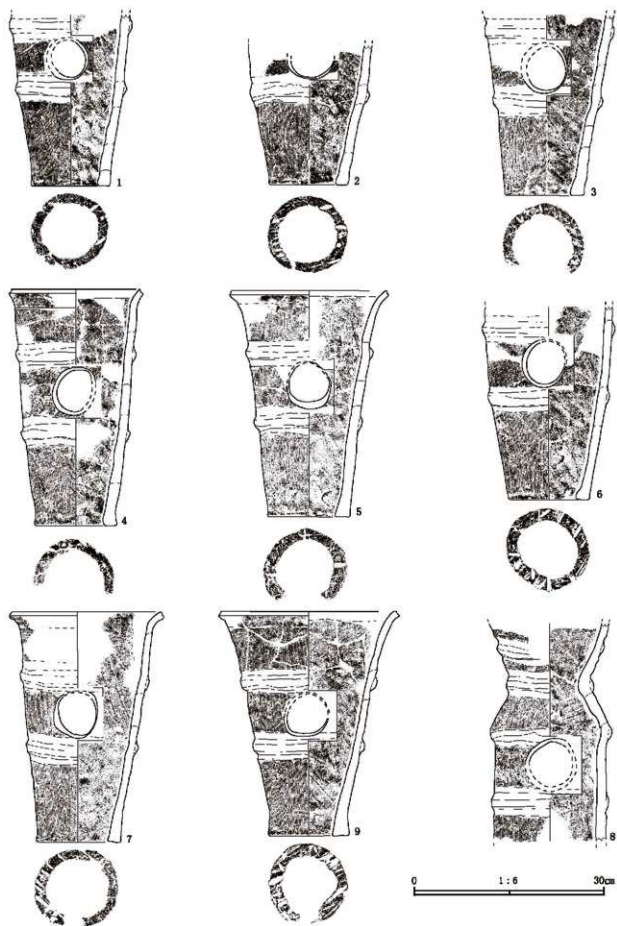
第8図 下増河上田中遺跡1号墳石室微細図・遺物出土位置図



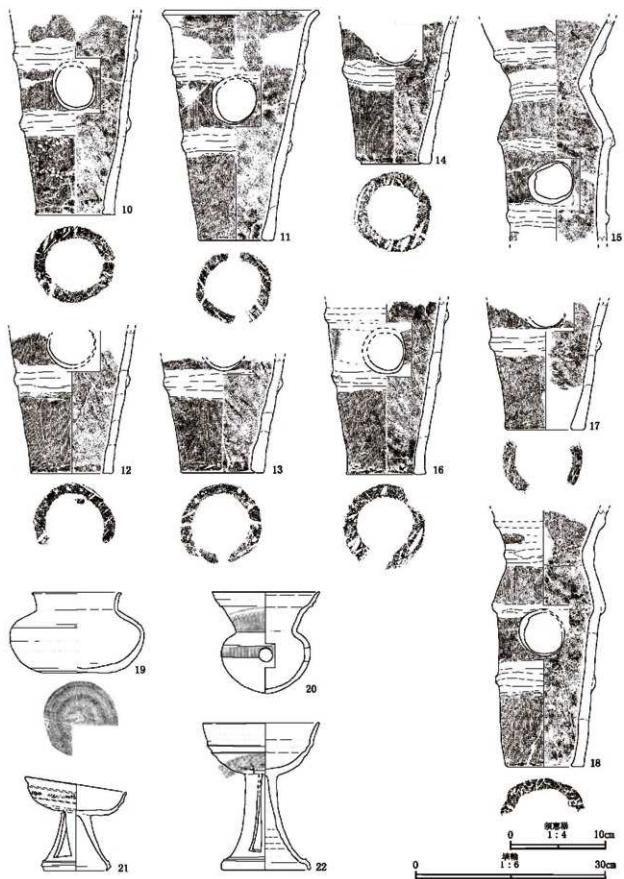
第9図 下増田上田中遺跡1号墳石室展開図



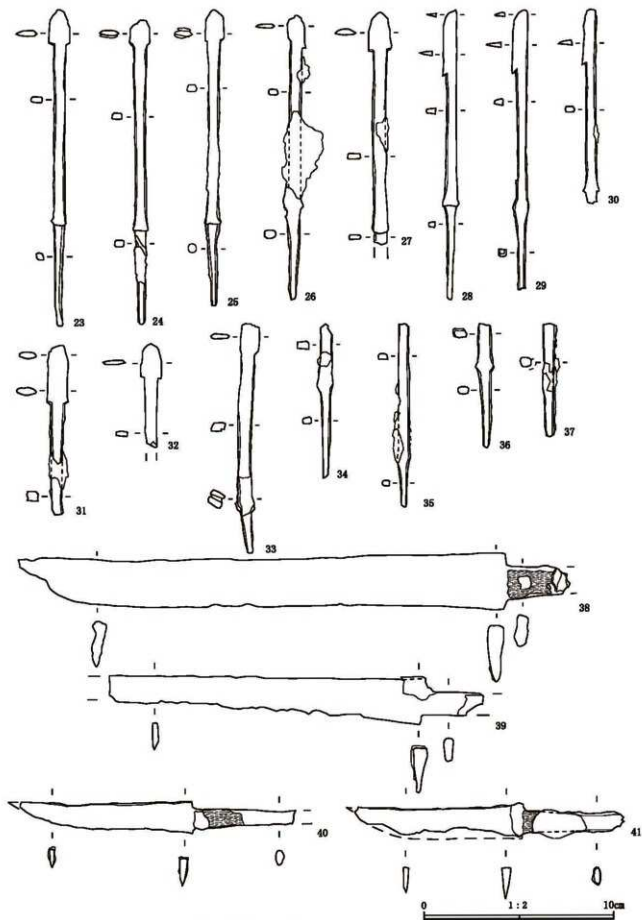
第10図 下増田上田中遺跡1号墳埴輪出土位置図・等高線図



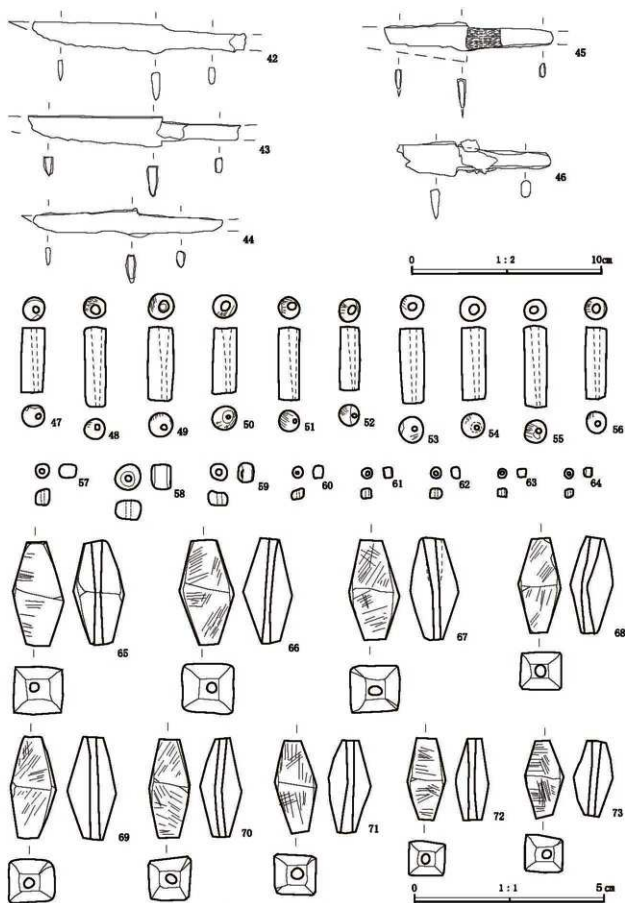
第11图 下增田上田中遺跡1号墳出土遺物実測图(1)



第12图 下埴田上田中遺跡1号墳出土遺物実測图(2)



第13图 下增田上田中遺跡1号墳出土遺物実測图(3)



第14图 下增田上田中遺跡1号墳出土土遺物实例图(4)

第2表 下増田上田中遺跡1号墳 出土遺物観察表

遺物 (1~18)

番号	形態・部位	法量 (cm) (口・底・高)	形状 (cm)		穿孔 (cm)		色調	跡土	刷毛目 (Qmchより)		位置	備考
			形状	実寸/製寸	形状	縦×横			外面	内面		
1	円筒 基底部~体部	12.0 27.5	三角形	11 15.6	円	6.5×6.0	淡褐色	砂粒 チャート	12本	斜め 10本	右	2条3段 内面に一部環状痕がみられる。
2	円筒 基底部~体部	13.5 22.0	台形	— 12.6	円	—×7.5	淡褐色	砂粒 チャート	11本	斜め 9本	右	2条3段
3	円筒 基底部~体部	12.5 28.5	台形	11.4 15.5	円	7.8×7.0	淡褐色	砂粒 チャート	12本	斜め 10本	右	2条3段 外面最下段に一部焼きむらが見られる。
4	円筒	(20.1) 12.5 (37.3)	三角形	— 15	円	7.2×6.8	淡褐色	砂粒 チャート	11~12本	斜め 10本	右	2条3段 基底部外周に一部焼きむらが見られる。外面最上段に赤影を施すほか、口縁から2.5cm下には花輪を
5	円筒	(24.5) 12.8 (35.8)	三角形	9.6 11.2 15	円	7.8×7.0	淡褐色	砂粒 チャート	12本	斜め 9~10本	—	2条3段 外面最下段に一部焼きむらが見られる。外面最上段に赤影を施す。
6	円筒 基底部~体部	12.9 30.5	三角形	11.3 14	円	7.1×6.9	淡褐色	砂粒 チャート	11本	斜め 10本	右	2条3段
7	円筒	(23.5) 13 (36.5)	台形	9.4 11.5 15.6	円	7.5×6.8	淡褐色	砂粒 チャート	10~11本	斜め 9~10本	右	2条3段 外面最下段に一部焼きむらが見られる。外面最上段に赤影を施す。
8	朝顔形 体部~頸部	— 33.3	台形	5.4 8.2 11	円	6.5×6.8	淡褐色	砂粒 チャート	12本	斜め 10~11本	—	外面順路より上に赤影を施す。肩部突帯貼り付け・貫徹後、タテハケを行う。
9	円筒	(27.7) 12.5 (35.6)	台形	10.8 10.4 14.4	円	7.0×7.0	淡褐色	砂粒 チャート	11本	斜め 10~11本	右	2条3段 外面最上段に口縁端まで赤影がみられる。
10	円筒 基底部~体部	12.5 31.6	台形	11 14.9	円	6.8×7.0	淡褐色	砂粒 チャート	10~11本	斜め 9~10本	右	2条3段 外面最上段に赤影を施す。最下段は棒状工具による刺突痕(溝跡?)が多く見られる。
11	円筒	(24.2) 11.7 (36.7)	台形	9.3 11.6 15.8	円	7.0×7.2	淡褐色	砂粒 チャート	11本	斜め 10~11本	右	2条3段 外面最下段に一部焼きむらが見られる。外面口縁部付近(一部内面まで)に赤影を施す。
12	円筒 基底部~体部	12.7 22.2	台形	— 15	円	—×6.8	淡褐色	砂粒 チャート	10本	斜め 9本	右	2条3段 外面最下段に一部焼きむらが見られる。
13	円筒 基底部~体部	13.3 18.1	三角形	— 14.3	円?	—	淡褐色	砂粒 チャート	10~11本	斜め 9~10本	右	2条3段
14	円筒 基底部~体部	12.7 22.4	台形	— 14.8	円?	—	淡褐色	砂粒 チャート	12本	斜め 10本	右	2条3段
15	朝顔形 体部~頸部	— 35	台形	5.1 9.6 12	円	6.6×7.0	淡褐色	砂粒 チャート	10~11本	斜め 10本	—	外面順路より上に赤影を施す。肩部突帯貼り付け・貫徹後、タテハケを行う。外面最下段に一部焼きむら
16	円筒 基底部~体部	12.9 28.3	三角形	9.9 15.7	円	6.5×6.4	淡褐色	砂粒 チャート	10~11本	斜め 9~10本	右	2条3段 外面最上段と一部2段目に赤影を施す。墳頂斜面部から出土。
17	円筒 基底部~体部	12.5 20.1	台形	— 13.7	円?	—	淡褐色	砂粒 チャート	10本	斜め 9~10本	—	2条3段
18	朝顔形 基底部~頸部	13.1 40.5	台形	5.4 8.5 11.3 15.2	円	7.4×7.0	淡褐色	砂粒 チャート	10~11本	斜め 10~11本	—	外面順路より上に赤影を施す。肩部突帯貼り付け・貫徹後、タテハケを行う。1号墳南側の大溝内環土下位から出土。

銅器類 (19~22)

番号	出土位置	器種	法量 (cm)	色調	鏡成	成形・調整	備考
19	石室入口 (前庭部)	銅製懸 短頸壺	口径: 9.4 底径: 6.6 器高: 8.5	暗灰色	良好	ロクロ成形。肩部に2条の比喩が平行に回る。直面部付近は面割ノリで、中心にはヘラ切り痕が残り、外面肩より上は高反動が多く付着し、白色が見られる。	最大径14.2cm。胴部を一部欠損。
20	玄室内	銅製懸 壺	口径: 11.4 胴径: 9.4 器高: 10.7	暗灰色	良好	ロクロ成形。胴部外面は幅3cmにわたり波状文が回る。胴部中位は2条の比喩で区別され、その間に磨削状工具による強い凹状痕がある。外面肩部、内面口縁部および直面部には部分的に高反動が残り、光沢がみられる。	胴部径6.4cm。鑑入品(褐色)か?陶器類年TK47型の特徴を備え、伝世品の可能性がある。
21	玄室内	銅製高 弁	口径: 10.8 底径: 6.7 器高: 10.0	暗灰色	良好	ロクロ成形。胴部と頸部の接合部は、焼成過多のため凹凸がみられている。胴部透かしはラップ形で、外側から3ヶ所穿孔する。外部外面に2条の比喩で波状文を施す。	弁部1/4欠損。白色粒子を多く含む。陶器類年MT15型の特徴を備える。
22	鏡道	銅製高 弁	口径: 12.5 底径: 9.3 器高: 16.0	灰色	良好	ロクロ成形。胴部透かしはラップ形で、外側から5ヶ所穿孔する。外部外面に磨削状工具を斜めに磨かしたと思われる強い凹状痕が回る。外面外部下位には「X」印のヘラ記号を施す。	弁部、胴部を一部欠損。石室敷おろし高反動を多く含む。陶器類年MT16型の特徴を備える。

鉄製品 (23~46)

番号	種類	出土位置	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
23	鉄鏃	8 回参照	16.7	1.1	0.3	11.7	長頸長三角形鏃。刃長1.8cm、刀幅1.1cm、茎長5.3cm、幅0.5cm、厚さ0.3cm、基部に線刻痕あり。
24	鉄鏃	8 回参照	16.1	1.1	0.4	14.4	長頸長三角形鏃。茎長4.9cm、幅0.5cm、厚さ0.35cm、刃先を一部欠損する。
25	鉄鏃	8 回参照	15.6	1	0.45	10.8	長頸長三角形鏃。刃長1.6cm、刀幅0.9cm、茎長4.4cm、基部0.7cm、厚さ0.4cm
26	鉄鏃	8 回参照	15.1	1	0.4	23.1	長頸長三角形鏃。刃長1.7cm、刀幅0.95cm、茎長4.7cm、基部0.7cm、厚さ0.35cm(それだけ線刻は除く)。
27	鉄鏃		12.1	1.2	0.4	11.7	長頸長三角形鏃。刃長1.95cm、刀幅1.1cm、基部はわずかに残存する。
28	鉄鏃	8 回参照	15.2	0.8	0.35	10.1	長頸片刀鏃。刃長3.3cm、刀幅0.7cm、茎長4.9cm、基部0.6cm、厚さ0.3cm、基部に線刻痕あり。
29	鉄鏃		14.8	0.9	0.5	10.7	長頸片刀鏃。刃長3.3cm、刀幅0.7cm、茎長4.1cm、基部0.7cm、厚さ0.4cm。
30	鉄鏃	狭道	10.2	0.8	0.45	8.2	長頸片刀鏃。刃長2.9cm、刀幅0.7cm、基部はわずかに残存。
31	鉄鏃	8 回参照	8.9	1.1	0.35	8.6	長頸長三角形鏃。茎長5.9cm、幅0.6cm、厚さ0.3cm、刃先を一部欠損する。
32	鉄鏃	8 回参照	7.2	1.1	0.45	4.9	長頸長三角形鏃。刀部1.7cm、刀幅1.1cm、頸部下半から茎は欠損。
33	鉄鏃	8 回参照	12.1	1.1	0.4	10.8	長頸長三角形鏃。茎長2.3cm、幅0.65cm、厚さ0.4cm(一部線刻)。刃先を一部欠損する。
34	鉄鏃	8 回参照	8.1	0.9	0.35	5.7	茎長4.7cm、基部0.5、厚さ0.3cm、長頸鏃か。
35	鉄鏃	8 回参照	9.7	1	0.5	7.2	茎長2.4cm、基部0.6cm、厚さ0.35cm、長頸鏃か。
36	鉄鏃	8 回参照	6.5	0.9	0.35	4.2	茎長4.1cm、基部0.7cm、厚さ0.35cm、頸部中位より上を欠損。
37	鉄鏃	8 回参照	5.9	0.7	0.5	6.1	基部のみ残存。
38	鉄刀		28.9	2.9	0.8	107.8	茎長3.4cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm残存。
39	鉄刀	8 回参照	19.8	2.4	0.7	60.3	茎長3.4cm、基部1.2cm、厚さ0.5cm残存。刃先を一部欠損する。
40	刀子	8 回参照	14.5	1.6	0.55	23.2	茎長5.5cm、基部1.1cm、厚さ0.5cm、基部に線刻痕あり。刀部はやや外反する。
41	刀子	8 回参照	14.1	1.7	0.6	25.8	茎長5.1cm、基部1.2cm、厚さ0.7cm(一部線刻)。刃先を欠損する。
42	刀子		11.3	1.6	0.4	15.1	茎長4.3cm、幅0.9、厚さ0.4cm残存。
43	刀子		11.1	1.6	0.5	17.3	茎長4.2cm、基部1.0cm、厚さ0.5cm。
44	刀子		9.9	1.3	0.45	11.8	茎長4.6cm、基部1.0cm、厚さ0.4cm。
45	刀子		8.9	1.35	0.45	11.1	茎長4.5cm、基部1.1cm、厚さ0.45cm、刀柄上平を欠損する。
46	刀子	8 回参照	8.1	1.7	0.6	15.2	茎長5.1cm、基部1.1cm、厚さ0.5cm、錆化が激しい。

凡例：鉄製品の計測値について、錆化により長さや幅、厚みが増している場合は、錆がない部分の計測値を用いた

玉類 (47~56)

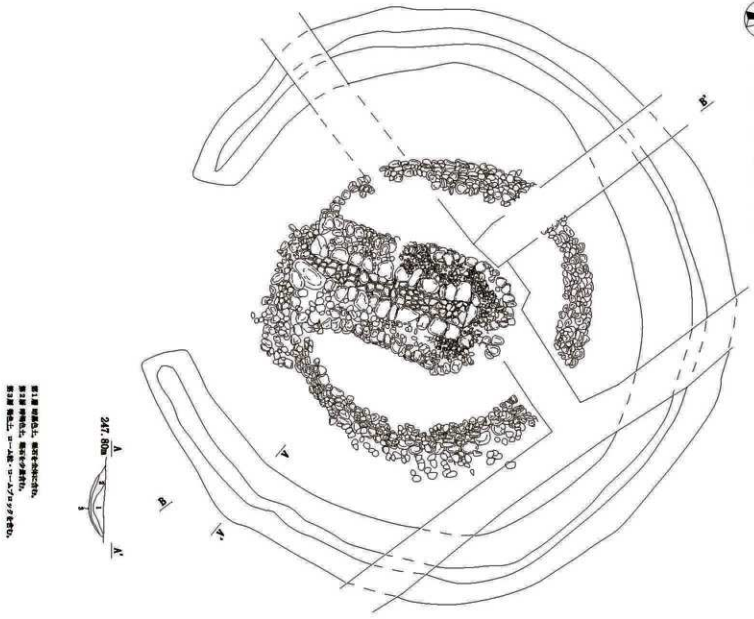
番号	種類	出土位置	法量 (cm)	素材	成形の特徴	備考
47	管玉	石室一括 (床面)	長さ1.7 径0.6	碧玉	孔径は0.2、0.1cm、両面穿孔で、管内は真っ直ぐである。全面とも丁寧に研磨し、縦はやや丸みを帯びる。	1.3g 淡緑色
48	管玉	石室一括 (床面)	長さ2.1 径0.6	碧玉	孔径は0.3、0.1cm、両面穿孔で、管内は真っ直ぐである。片方の孔は面の中心から外れている。全面とも丁寧に研磨し、縦はやや丸みを帯びる。	1.3g 淡緑色
49	管玉	石室一括 (床面)	長さ1.9 径0.7	碧玉	孔径は0.3、0.1cm、両面穿孔で、管内は真っ直ぐである。片方の孔は面の中心から外れている。全面とも丁寧に研磨し、縦はやや丸みを帯びる。	1.7g 淡緑色
50	管玉	石室一括 (床面)	長さ1.7 径0.6	碧玉	孔径は0.3、0.1cm、両面穿孔で、管内は真っ直ぐである。片方の孔は面の中心から外れ、孔の周りは約2cmにわたって凹む。全面とも丁寧に研磨し、縦はやや丸みを帯びる。	1.4g 淡緑色
51	管玉	石室一括 (床面)	長さ1.9 径0.6	碧玉	孔径は0.25、0.1cm、両面穿孔で、管内は真っ直ぐである。片方の孔は面の中心から外れている。全面とも丁寧に研磨し、縦はやや丸みを帯びる。	1.0g 淡緑色
52	管玉	石室一括 (床面)	長さ1.7 径0.6	碧玉	孔径は0.25、0.1cm、両面穿孔で、管内は真っ直ぐである。両面の孔は共に、面の中心から外れている。全面とも丁寧に研磨し、縦はやや丸みを帯びる。	1.0g 淡緑色
53	管玉	石室一括 (床面)	長さ2.0 径0.6	碧玉	孔径は0.25、0.15cm、両面穿孔で管内は真っ直ぐである。全面とも丁寧に研磨し、縦はやや丸みを帯びる。	1.6g 淡緑色
54	管玉	石室一括 (床面)	長さ1.9 径0.6	碧玉	孔径は0.3、0.1cm、両面穿孔で、管内は真っ直ぐである。片方の孔は面の中心から外れている。全面とも丁寧に研磨し、縦はやや丸みを帯びる。	1.4g 淡緑色
55	管玉	石室一括 (床面)	長さ2.1 径0.6	碧玉	孔径は0.25、0.1cm、両面穿孔で、管内は真っ直ぐである。片方の孔は面の中心から外れている。全面とも丁寧に研磨し、縦はやや丸みを帯びる。	1.4g 淡緑色
56	管玉	石室一括 (床面)	長さ1.9 径0.6	碧玉	孔径は0.25、0.1cm、両面穿孔で、管内は真っ直ぐである。片方の孔は面の中心から外れている。全面とも丁寧に研磨し、縦はやや丸みを帯びる。	1.2g 淡緑色

玉類 (57～73)

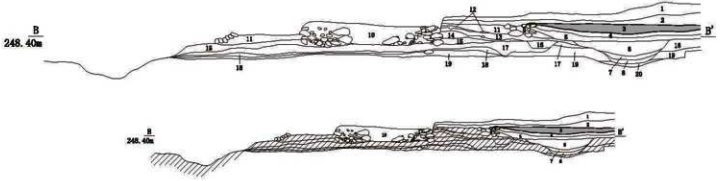
番号	種類	出土位置	法量 (cm)	素材	成形の特徵	備考
57	ガラス小玉	石室一拵 (床面)	長さ0.5 径0.4	ガラス	孔径は0.25、0.1cm、両面穿孔で、管内は真っ直ぐである。全面とも丁寧に研磨し、壁は丸みを帯びる。横断面はやや台形を呈す。	0.1g 淡青色
58	ガラス小玉	石室一拵 (床面)	長さ0.55 径0.7	ガラス	孔径はそれぞれ0.15cm、大径で全体的に丸みを帯びる。側面には縦線が目立つ。	0.4g 濃青色
59	ガラス小玉	石室一拵 (床面)	長さ0.4 径0.5	ガラス	孔径はそれぞれ0.15cm、中径で全体的に丸みを帯びる。内部には気泡、砂粒が見られる。	0.1g 濃青色
60	ガラス小玉	石室一拵 (床面)	長さ0.3 径0.3	ガラス	孔径はそれぞれ0.15cm、全体的に丸みを帯び、内部には気泡・砂粒が見られる。	0.1g未測 淡青色
61	ガラス小玉	石室一拵 (床面)	長さ0.25 径0.3	ガラス	孔径はそれぞれ0.1cm、全体的に丸みを帯び、内部には気泡が見られる。	0.1g未測 淡青色
62	ガラス小玉	石室一拵 (床面)	長さ0.3 径0.3	ガラス	孔径はそれぞれ0.1cm、全体的に丸みを帯び、内部には気泡が見られる。	0.1g未測 淡青色
63	ガラス小玉	石室一拵 (床面)	長さ0.25 径0.25	ガラス	孔径はそれぞれ0.1cm、全体的に丸みを帯び、内部には気泡が見られる。	0.1g未測 淡青色
64	ガラス小玉	石室一拵 (床面)	長さ0.25 径0.25	ガラス	孔径はそれぞれ0.1cm、全体的に丸みを帯び、内部には気泡が見られる。	0.1g未測 淡青色
65	切子玉	石室一拵 (床面)	長さ2.7 幅1.3	摩石	孔径はそれぞれ0.3cm、側面は8面で、細長い台形を呈す。各面とも丁寧に研磨され、光沢を帯び、穿孔は管内中心付近で食い違いによる段差が見られる。	7.0g
66	切子玉	石室一拵 (床面)	長さ2.9 幅1.4	摩石	孔径はそれぞれ0.3cm、側面は8面で、細長い台形を呈す。各面とも丁寧に研磨され、光沢を帯び、穿孔は管内中心付近で食い違いによる段差が見られる。	7.1g
67	切子玉	石室一拵 (床面)	長さ2.7 幅1.3	摩石	孔径はそれぞれ0.35cm、側面は8面で、細長い台形を呈す。各面とも丁寧に研磨され、光沢を帯び、穿孔は管内中心付近で食い違いによる段差が見られる。	6.2g
68	切子玉	石室一拵 (床面)	長さ2.5 幅1.1	摩石	孔径はそれぞれ0.35、0.3cm、側面は8面で、細長い台形を呈す。各面とも丁寧に研磨され、光沢を帯び、穿孔は管内中心付近で食い違いによる段差が見られる。	4.4g
69	切子玉	石室一拵 (床面)	長さ2.7 幅1.2	摩石	孔径はそれぞれ0.3cm、側面は8面で、細長い台形を呈す。各面とも丁寧に研磨され、光沢を帯び、穿孔は管内中心付近で食い違いによる段差が見られる。	5.6g
70	切子玉	石室一拵 (床面)	長さ2.7 幅1.1	摩石	孔径はそれぞれ0.3cm、側面は8面で、細長い台形を呈す。各面とも丁寧に研磨され、光沢を帯び、穿孔は管内中心付近で食い違いによる段差が見られる。	4.9g
71	切子玉	石室一拵 (床面)	長さ2.5 幅1.0	摩石	孔径はそれぞれ0.3cm、側面は8面で、細長い台形を呈す。各面とも丁寧に研磨され、光沢を帯び、穿孔は管内中心付近で食い違いによる段差が見られる。	4.3g
72	切子玉	石室一拵 (床面)	長さ2.2 幅1.0	摩石	孔径はそれぞれ0.3、0.25cm、側面は8面で、細長い台形を呈す。各面とも丁寧に研磨され、光沢を帯び、穿孔は管内中心付近で食い違いによる段差が見られる。	2.9g
73	切子玉	石室一拵 (床面)	長さ2.1 幅1.0	摩石	孔径はそれぞれ0.3、0.25cm、側面は8面で、細長い台形を呈す。各面とも丁寧に研磨され、光沢を帯び、穿孔は管内中心付近で食い違いによる段差が見られる。	3.0g



(下増田上田中遺跡2号墳)



第1層 埴輪土、黒灰土、黒灰土中に散在する、
 第2層 埴輪土、黒灰土中に散在する、
 第3層 埴輪土、黒灰土中に散在する、
 第4層 埴輪土、黒灰土中に散在する、



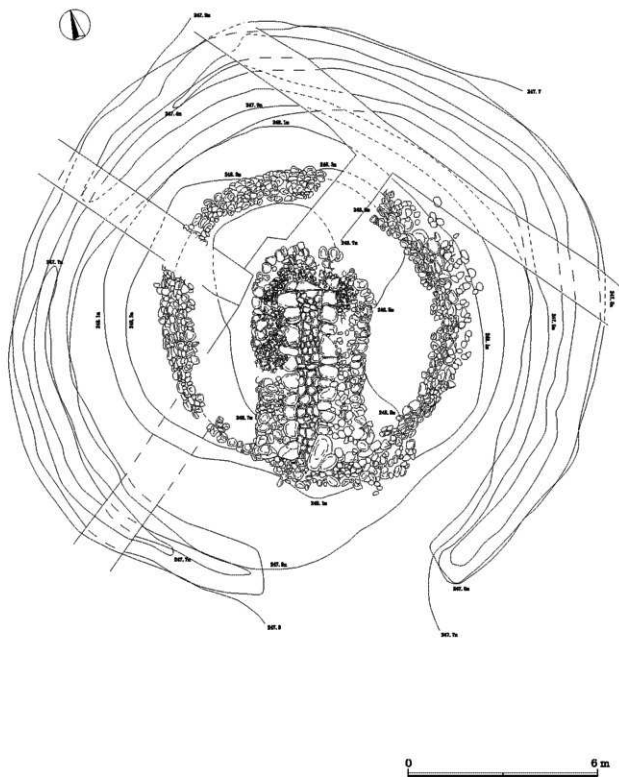
埴土質粘土または地山

- 第1層 埴土、黒灰土、黒灰土中に散在する、
- 第2層 埴土、埴土を多く含む、しまっている。
- 第3層 埴土、 Δ - Δ 埴土。
- 第4層 埴土、埴土を少量含む、
- 第5層 埴土、埴土を少量含む、
- 第6層 埴土、埴土を多く含む、
- 第7層 埴土、埴土を少量含む、
- 第8層 埴土、ローム-ロームブロックを含む、
- 第9層 埴土、埴土を少量含む、
- 第10層 埴土、埴土を含む、

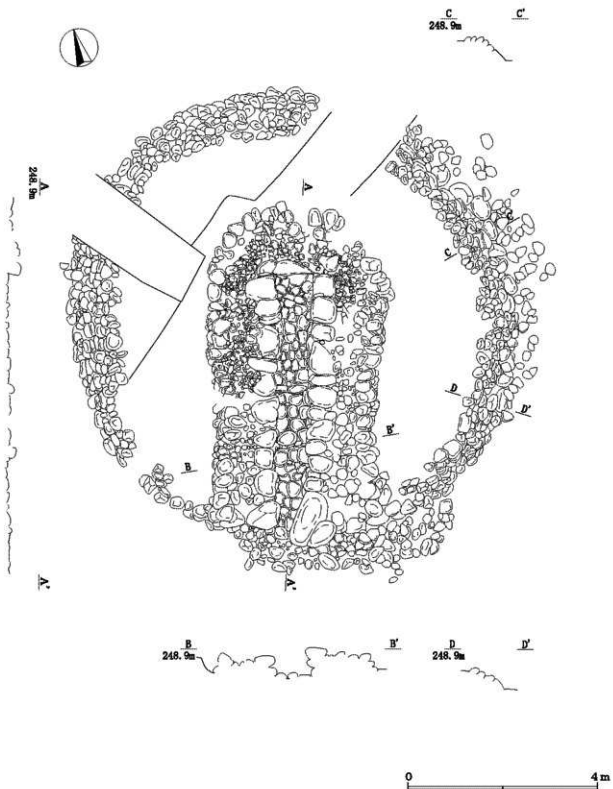
- 第11層 埴土、埴土を含む、しまりなくもろい、
- 第12層 埴土、埴土を少量含む、
- 第13層 埴土、埴土を含む、
- 第14層 埴土、埴土を含む、しまりなくもろい、
- 第15層 埴土、埴土を含む、(4層よりやや多く含む)
- 第16層 埴土、ロームブロックを含む、
- 第17層 埴土、埴土を少量含む、
- 第18層 埴土、埴土を少量含む、
- 第19層 埴土、埴土を少量含む、
- 第20層 埴土、地山ローム。

第18図 下増田上田中遺跡2号墳全体図・セクション図

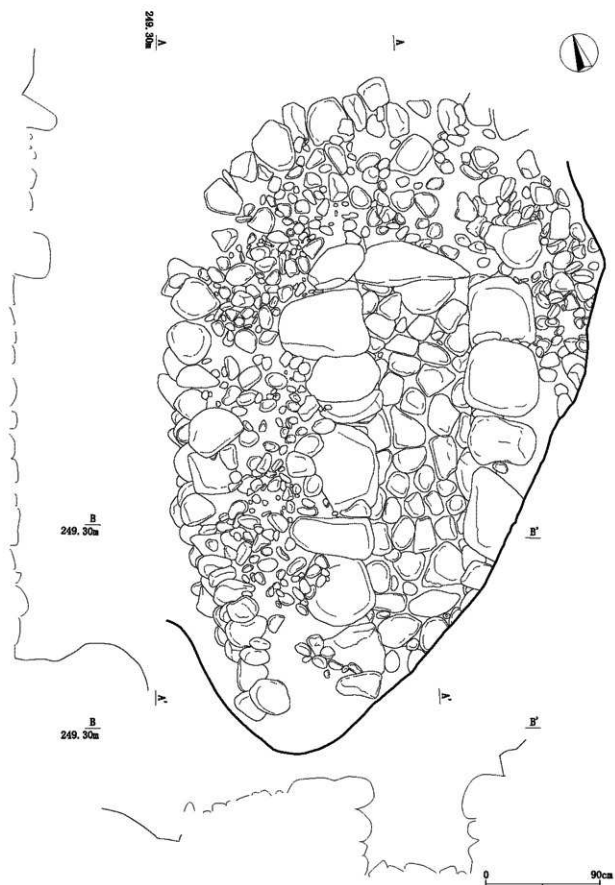




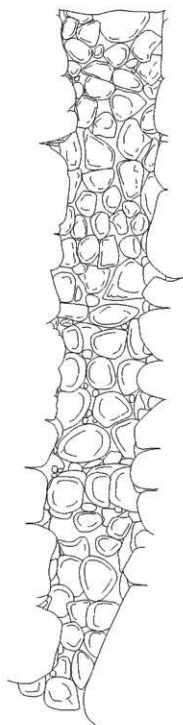
第16图 下増田上田中遺跡2号墳等高线图



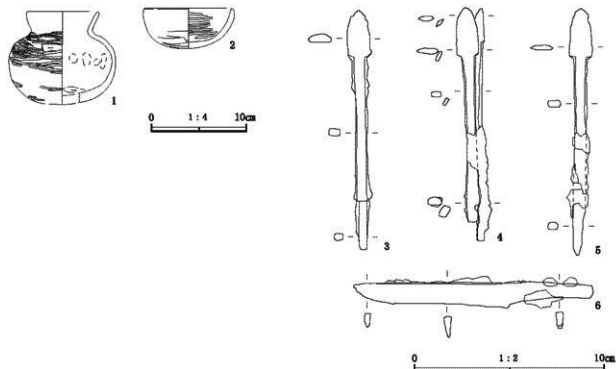
第17図 下増田上田中遺跡2号墳石室平面図・エレベーション図



第18図 下増田上田中遺跡2号墳玄室微細図・エレベーション図



第19図 下増田上田中遺跡2号墳石室展開図



第20図 下増田上田中遺跡2号墳出土遺物実測図

第3表 下増田上田中遺跡2号墳 出土遺物観察表

土師器 (1・2)		数量 (cm)		色調	構成	成形・調整	備考
1	冨石中 土師器 短頸壺	口径: (7.2) 底径: - 器高: (9.6)		浅黄褐色	普通	外面は口辺部横撫で、胴部～底部は横位基調の磨き。内面は口辺部横撫で、胴部～底部はヘラ撫で、胴部中央の一部に指腹圧痕が認められる。	約1/5残存。砂粒を多く含む。
2	周溝内 土師器 坏	口径: 9.2 胴径: - 器高: 4.3		橙色	普通	外面は口辺部横撫で、体部はヘラ削り。内面は口縁部横撫で、体部は横位基調の磨き、口辺部がゆるく内開する。	約1/2残存。黒色粒・織を含む。

鉄製品 (3～6)

番号	種類	出土位置	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
3	鉄鏃	支倉	12.2	1.2	0.36	11	長楕長三角形鏃。刃長2.6cm、刃幅1.2cm、厚さ0.36cm、茎長2.7cm残存。
4	鉄鏃	支倉	右: 12.3 左: 11.3	右: 1.0 左: 1.1	右: 0.36 左: 0.36	17.2	長楕長三角形鏃。刃長1.3cm残存。茎部は錆化が激しく不明。2本の鉄鏃が同着している。
5	鉄鏃	支倉	13	1.26	0.36	11.7	長楕長三角形鏃。刃長2.6cm、刃幅1.2cm、厚さ0.3cm、茎長2.6cm、茎幅1.1cm残存。
6	刀子	支倉	12.7	1.7	0.5	19.6	茎長5.4cm、茎幅1.3cm、厚さ0.5cm。

凡例：鉄製品の計測値について、錆化により長さや幅、厚みが増している場合は、錆がない部分の計測値を用いた。

VI 成果とまとめ

紙面の都合もあり、前項までに主に図面を掲載するのみで古墳の内容について詳しく触れることができなかった。そこで、本報告書の最後ではあるが、紙数の限り下増田上田中1・2号墳（以下、1・2号墳とする）の諸特徴を提示し問題点を整理したい。

下増田上田中1号墳

墳丘および外部施設（第7図）

墳丘の規模は葦石の根石部分で直径約12mを測る円墳である。後世の耕作による擾乱の影響で、葦石は1～4段を残し上部はすべて削平されていた。使用石材は川原石で人頭大～拳大まで大小様々な石が用いられている。石材の供給源は本墳の北東に隣接して流れる増田川に求められよう。増田川の浸食等により墳丘の北東～南東側は崩落している。墳丘外縁には幅2～2.5mの基壇を有する。墳丘の外側には幅約3～4mの周溝がめぐり、それらを含めた直径は25m程度と推測される。全体図（第7図）をみると、本墳の周溝は「円」ではなく「弧」を描くように掘削されているが、南北にのびる溝は本墳の周溝よりも深いため、これは円墳の周溝を利用して後世に掘り込まれた溝と考えられる。そのため、周溝の形状は本来の規模に比べて大幅に変改されており、周溝内のピットも1号墳には伴わないものと推測される。主体部（第6・9図）

前述のように、本墳の主体部は羨道が玄室の主軸に対しほぼ直角に接続する平面T字形を呈する横穴式石室で、ほぼ南に開口していた。真北よりやや東に主軸をとり、開口部から奥壁までの距離は約7mを測る。羨道の規模は全長約6m、幅70°で、中央付近に設置された榦石によって二分されるような形状をとる。羨道の壁面はほとんど削平され、2～3段が残る程度である。壁体はやや小振りの川原石を用いた小口積・横積みを用いる。床面については、玄室手前（開口部付近）は擾乱により壊されていたものの、中央の榦石から奥の床面に小礫を敷き、さらにその下には座布団状の扁平な川原石を敷き詰めている状況が確認できた。棺、骨などは検出されていない。

玄室プランはおよそ2.5×1mの長方形で、天井石はすべて失われていた。壁面の石材には大きいもので7～80°、平均して4～50°の川原石を用いており、積み方は羨道部分とほぼ同じである。床面の状況も羨道と基本的には同じであるが、榦石を境に玄室側では小礫面が20°ほど低くなっていた。なお、壁石に赤色顔料の塗布は認められなかった。石室の背後には小円礫を寄せた裏込めが施されている。その厚さは玄室周辺で約1～1.5m、羨道周辺で70°～1°ほどあり、外側にはさらに葦石状の円礫を全面に配することで補強している。また、裏込めをおさえる円礫の配置は平面図をみると、①羨道中央の榦石から玄室までの区間の中間点付近、②榦石の外側（開口部寄り）の2か所でラインが通る傾向が認められる。これらは石室の構築における作業単位と同調しているものと考えられ、注意される。

埴輪（第10・11・12図）

円筒および朝顔形埴輪が基壇面の外縁に近い位置に約1.5m間隔で設置され、基底部から第一突帯の半分程度の深さまで埋設されていた。また、形象埴輪は検出されなかった。原位置を保っていたと思われるものは15本で、周溝内に3本転落していた。また、墳丘上にはA=B 軽石が弧状に堆積した円形の葦石込みが幾つかあり、これらは埴輪抜き取り痕跡の可能性もある。埴輪は墳丘を全周していたものと考えられ、設置間隔を考慮すると本墳の埴輪樹立本数は35本程度と推測される。円筒埴輪はすべて2条3段構成で、朝顔形埴輪も円筒部については2条3段であった。各個体とも大きさ、形態のばらつきは少なく均整のとれたプロポーションである。円筒埴輪は最上段に、朝顔形埴輪は頸部より上に赤彩を施すものが半数ある。なお、外面調整はクマハケのみ、焼成は良好で窯焼きによるものと考えられる。

副葬品（第8・12・13・14図）

発掘当時の記録が少なく、すべての遺物について出土位置を復元できた訳ではないが、横溝中央の掘石付近で鉄鏝や刀子・鉄刀のほか滑石製切子玉（八面体）がまとまって出土した。また、玄室内からは須恵器・鉄鏝・碧玉製管玉・ガラス小玉が出土している。玄室内の副葬品は東側に集中する傾向がみられることから被葬者は東頭位で埋葬されていたものと考えられる。本墳の築造時期は須恵器や鉄鏝などの形制的特徴から、およそ6世紀初頭と推定される。

下増田上田中2号墳

墳丘および外部施設（第15・16図）

1号墳の北西約30mに位置し、墓石の根石部分で直径10mを測る円墳である。石室開口部前を覆って全周する周溝の幅は約2mで、周溝を含めた直径は約19mである。1号墳と異なり明確な基壇は存在しないが、根石と同溝の間には幅1m程度の平坦面がある。1号墳と同様、後世の掘削によって墓石は6～7段を残し削平されていた。使用石材および積み方は1号墳と同様で、根石部分には若干大きめの石を用いている。断ち割りの観察結果、墳丘盛土は墳丘に向かってやや傾斜するように、小礫混じりの黒褐色土と暗褐色土を版築状に積み重ねている。

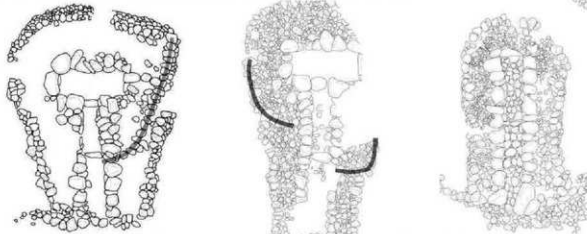
主体部（第17・18・19図）

真北よりやや東に傾り、幅約70cm、全長5.6mを測る無袖型石室である。横溝長は3.2mで幅70cm、玄室長は2.4mで幅は手前60～奥80cmの規模を有する。開口部から約1.8mの位置に平面円形の石を横渡し状に置く。さらに、横溝と玄室の境（開口部から3.2m）付近にも細長い石を横渡しに配し、これらは欄石のような性格をもつと考えられる。床面には小礫を敷き、さらにその下に直径2～3cmの扁平な石を敷き詰める。なお、欄石を境とした横溝と玄室床面の高さについてはほぼ同じである。

壁体構成については、1号墳と同様に小口積・横積みを用いながら川原石を積んでいる。石材の大きさは1号墳と比べてやや大きめのものが多く、石の隙間に小礫をはめ込む傾向が強いように思われる。目地の通りは1号墳と同様にあまりみられず、また壁石の赤影も認められなかった。石室の背後には裏込めが施される。厚さは80cm～1m程度であり、1号墳より少ないものを使用石材や外側に円礫を配するなどの共通点もみられる。

副葬品（第20図）

周溝底近くから土師器甕が、墓石の隙間から土師器短頸壺がそれぞれ出土している。また、玄室奥壁の床面覆土中から鉄鏝および刀子が出土した。1号墳とは異なり埴輪は出土していない。本墳の築造時期は土師器や鉄鏝の特徴からおおよそ6世紀前半と考えられ、隣接する1号墳と近似した時期の築造と推測される。



第21図 裏込めおさえ石の推定ライン（左：後関3号墳 中：上田中1号墳 右：上田中2号墳）

下増田上田中1・2号墳の考察

下増田上田中1・2号墳を考える上で特徴的なのは、やはりその石室形態であり、また本墳を含む狭い地域内（同一の河川流域内）に同様の石室構造をもつ古墳が短期間に集中している点であろう。本墳の東約3kmの九十九川沿い低地にある後関3号墳（円墳・直径20m・6世紀初頭）も平面T字形の横穴式石室を有し、石室の平面形態や石の積み方など多くの点で1号墳と共通性をもつことから、両墳には同じ技術者が関わった可能性があると指摘は従来からなされている¹⁾。石室裏込めをおさえる石の位置を見ても、その傾向を伺うことができる（第21図）。

また、平面形・規模は異なるものの、1号墳の南東約4.5kmの碓氷川左岸に位置する築瀬二子塚古墳（前方後円墳・80m・6世紀初頭）とも、両墳の石室の石の積み方はよく似ていることから、おそらく築瀬二子塚古墳の石室づくりに関わった技術者が1号墳と後関3号墳の石室にも関わったものと考えられる²⁾。一方、2号墳については、無袖型石室である点や埴輪をもたない点など一見、1号墳との差異は大きいように思える。墳丘・石室の残存状況は悪いため、あくまで推測の域は出ないが、2号墳の石室構築方法にも1号墳と共通する点があり、同一技術者の関与も想定される。

それでは、下増田上田中1・2号墳の成立基盤はいついどこに求められるのであろうか。九十九川流域西辺を見渡すと、古墳時代前期の小規模集落（小日向遠地谷戸・小日向田中・小日向新浜遺跡）が単発的に営まれた後、一定期間の断絶を挟んで後期初頭ごろに大規模集落が出現する（小日向遠丸・高梨子森下遺跡）。また、後関3号墳に近い九十九川右岸の台地端部に位置する杉名薬師・高橋遺跡でも同様の集落展開が認められ、これらの集落が後関3号墳や築瀬二子塚古墳を出現させる契機となったと考えられている³⁾。これらのことから、1・2号墳をはじめ後関3号墳や築瀬二子塚古墳、琴平山古墳（前方後円墳・52m）といった、6世紀初頭から前半ごろの築造と考えられる碓氷川・九十九川流域の古墳の基盤となったのは、九十九川沿いの中～下位段丘や低地に新たに根付いた集落であったと推測される。

最後に、下増田上田中1・2号墳の被葬者について考えてみたい。石室形態や副葬品の内容から、1・2号墳および後関3号墳といった中型円墳の被葬者は築瀬二子塚古墳に次ぐ第二階層に位置する人物であり、それぞれの被葬者同士が直接的なつながりをもっていたと考えられる。果たして、1・2号墳より下位階層の古墳にも初期横穴式石室が採用されたかは周辺に調査事例がないので分からないが、県内他地域の様相を見渡すと、すべて小円墳にまで採用されたのではなく、やはり一定の上位階層までであったようである。有力古墳も、古墳成立の基盤となるような集落もなかった地域に突然、同一歩調を取るかのよう古墳が出現・展開するという現象は、それをよく表しているようにも思える。

おわりに

下増田上田中1・2号墳の調査成果の報告は、築瀬二子塚古墳を中心とした碓氷川・九十九川流域における古墳時代後期初頭の地域社会の一端を解明する上で不可欠であった。まず、調査から本報告書刊行までに長期間を要してしまった不手際と、紙面の都合上ほぼ事実記載の内容に留まらざるをえなかった不手際をお詫びしたい。今後、当該期の調査資料が増加することを願いつつ、本書が少しでも西毛の古墳文化研究の発展に寄与するところがあれば幸いである。

注1. 右島和夫 2001 「第四章 古墳時代 築瀬二子塚古墳」『安中市史 第四巻 原始古代中世資料編』安中市

注2. 右島和夫 2009 「碓氷川流域の古墳」『碓氷川流域の古墳文化』安中市ふるさと学習館

注3. 外山政子 2006 「古墳時代の集落について」『杉名薬師遺跡』安中市埋蔵文化財発掘調査団

主な参考文献

松島栄治・佐岡規雄 1970 「広瀬団地古墳群発掘調査報告」『前橋市文化財調査報告書 第1集』前橋市教育委員会

千田茂雄 1994 『九十九川沿岸遺跡群3』安中市教育委員会

大工原登ほか 2003 『築瀬二子塚古墳・築瀬首塚古墳』安中市教育委員会

写 真 图 版

図版 1



下増田上田中遺跡全景（上が北）



1号墳石室全景（北より）



1号墳石室・円筒埴輪列検出状況（南より）



1号墳葬石検出状況（西より）



1号墳鏡道検出状況



1号墳調査区西壁土層堆積状況（第7図A～A'）



1号墳調査風景（西より）

図版 3



1号墳玄室遺物出土状況1



1号墳玄室遺物出土状況2



1号墳羨道遺物出土状況1



1号墳円筒埴輪出土状況



1号墳羨道遺物出土状況2 (南東より)



2号墳全景 (南西より)



2号墳基石検出状況1



2号墳基石検出状況2



2号墳全景 (南東より)



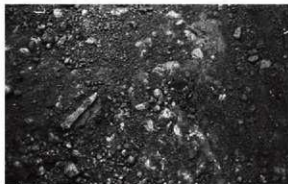
2号墳石室調査風景 (南より)



2号墳石室検出状況（南より）



2号墳遺物出土状況1



2号墳遺物出土状況2



2号墳墳丘断面割り状況1

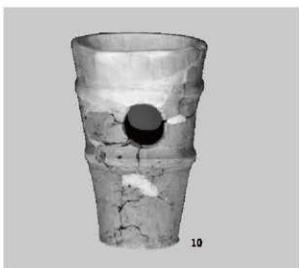


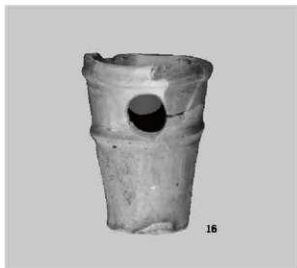
2号墳墳丘断面割り状況2

(下増田上田中遺跡 1号塚)



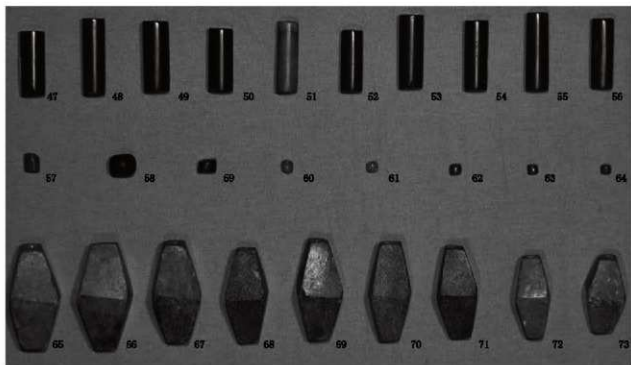
图版 7





图版 9





(下増田上田中遺跡2号墳)



発掘調査報告書 抄録

ふりがな	しもすだかみたなかいせき
書名	下増田上田中遺跡
副書名	団体営土地改良総合整備事業（下増田百石地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ番号	
編著者名	菅原 龍彦・壁 伸明
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	379-0292 群馬県安中市松井田町新堀245 Ⅱ027-382-1111
発行年	西暦2012（平成24年）3月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもすだかみたなかいせき 下増田上田中遺跡	しもすだかみたなかいせき 安中市松井田町 下増田手上田中地内	102113		38° 18' 43"	138° 48' 54"	19960210～ 19960301	約1800㎡	団体営土地改良総合整備事業（下増田百石地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下増田上田中遺跡	古墳	古墳	古墳2基	須恵器・埴輪・鉄器・土器等	1号墳はT字形石室を有する 2号墳は無袖型石室を有する

下増田上田中遺跡

—団体営土地改良総合整備事業（下増田百石地区）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 平成24年3月26日
編集・発行 安中市教育委員会
群馬県安中市松井田町新堀245
印刷 上毎印刷工業株式会社
群馬県前橋市天川大島町305-1